

〔冠辭考七〕ぬえこどり○中 又ぬえ鳥の

萬葉卷一に、奴ヌ要エ子コ鳥トリト歎ナキ居ラ者バ○中こはかれが聲のかなしくうらめしげなるを、人の哭泣に譬略ておけり、○中

卷五に、貧窮問の歌奴延鳥ヌノトリ乃能杼ノド與比居ヒノ爾云云、これも哭にたとへたる意は右に同じ、さて裏歎とかき能杼ノド與比ヒノといへるをもて、或人は隱聲になく鳥ならんといひしを、武藏の上野に實傳僧都といふ有しが、もと三井寺に住學せしほど、此寺にてぬえの鳴は凶きさがとていむを、たま／＼は聞侍りしに、遙なる谷に鳴も、耳とほるばかり高く苦しきこゑ也とかたり侍りし、又土佐人大神垣守がいへる、奴衣鳥ヌイトリは今の猿樂の笛のひしぎてふ音の如く鳴ぬ、亥の時ばかりより始めて夜る鳴なり、鳩よりもいさゝか大きにて、鶯の羽の如しと、よりておもふに、和名抄に鶯江恠鳥也とあれば、鼻などの類にて夜る鳴ならん、且喉呼ノドコヒとも書るは隱聲なるにはあらで、からこゑに鳴かたにていふ也けり、うら鳴は恨鳴也、

〔本朝食鑑六山禽〕鶯

源順曰、唐韻云、鶯恠鳥也、漢語抄云、沼江ヌ必大按、俚語言、深山有夜啼之鳥、其聲極惡、呼號鶯、或作鶯紀、州鼎峯、熊野山中有之、未知其真、昔近衛帝時、鶯棲于東三條林頭、夜夜乘黑雲、到禁闈寢宮之上、而脅犯於帝、帝命源賴政射之、賴政射而斃、其形猿頭蛇尾、手足如虎、聲似鶯、是未知何物之妖也、後建武中、隱岐廣有射怪鳥于禁庭、亦相似焉、本邦有天狗者、棲居深山、殺害不淨不正之人、山人言、形似大人、是老鷲之所化乎、

〔本朝食鑑六華和異同〕鶯

鶯、梅膺柞字彙曰、鶯、去紅切、音空、恠鳥也、又曰、鶯、寅射切、音夜、山海經曰、單張之山有鳥焉、其狀如雉、而文首、白翼、黃足、名曰白鶯、今本邦爲一物、二名、自古未詳其形色、唯爲妖恠耳、產婦鳥者、或曰姑獲鳥也、